



## 多職種チーム医療のベストプラクティス スペシャルニーズのある子どものケアの担い手として

● 特集にあたって ●

### チーム医療の推進者である 看護師の皆さまへ

2020年は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)により世界中が影響を受け、今まで当たり前感じていた価値観や行動様式について、誰もが立ち止まり考えなければならなくなった。しかし、子どもたちは新しい日常のなかで「お気に入りのマスク」を付け、「ソーシャルディスタンスを保ち」遊ぶ方法をすでに身につけつつある。

小児医療を支える現場に身を置く私たちは、そのような子どもたちの姿に背中を押されながら、前を向き、顔を上げ、しっかりと歩き始めなければならない、と背筋をピンと伸ばすのである。

一方で、新しい生活様式は人間のコミュニケーション方法にも影響を与えている。医療現場で日常的に行われていたカンファレンスや研修会は、厳選されたり、リモートになった。それまでこのことに多くの時間を使っていたことを実感しているなかで、思いがけず働き方改革を一気に加速させることになったのは怪我の功名である。しかし、医療、福祉、教育、保育など子どもを支える現場は多岐にわたっているため、カンファレンスや研修会を通じてこそ、さまざまな専門職が顔を合わせ、チーム医療を円滑に進めることにつながっていたことにも、あらためて実感する日々である。このような社会だからこそ、子どもたちのために力を

合わせなければならない場面があることは変わらない。

小児看護の現場の特徴は、医療、保健、福祉、保育、教育といった、制度も成り立ちも、かわる職種も異なる人々が、共に取り組まなければならないことが多くある。「新型コロナ後の世界」で、小児看護の現場が多職種チーム医療を駆使し、ベストプラクティスがあふれるようにまとめたいと思う。

今回、さまざまな立場の方からチーム医療についての考え方とベストプラクティスを報告いただいた。

本特集号では、「多職種チーム医療のベストプラクティス」というテーマで、あらためてチーム医療について考えたい。そして今こそ、さまざまな現場で取り組んでいる方たちと「ベストプラクティス」を共有したい。

読者にとって「よし！ 今日からやってみよう！」と思える1冊になっていたら、幸いである。

萩原綾子 Hagiwara Ayako  
神奈川県立こども医療センター副看護局長／  
小児看護専門看護師